

待兼山俳句会

第六百九十七回 世話人 山田安廣・上田恵子・鈴木輝子・根来眞知子

東中 亂・向井邦夫・森 茉衣

令和七年二月十七日（月） 会場 大阪俱楽部 会議室 締切 午後二時

出席者 濱戸幹三・山戸暁子・上田恵子・小出堯子・鈴木輝子・鈴木兵十郎・根来眞知子・東野太美子

向井邦夫・森 茉衣・山田安廣

投句者 碓井遊子・西條かな子・寺岡 翠・中嶋朱美・中村和江・西川盛雄・東中 亂・平井瑛三

以上出席者十一名+投句者八名 計十九名

兼題 春浅し・恋猫（幹三） 路の薹・獵名残（暁子） 当季雜詠 通じて八句

次回 例会 令和七年三月十七日（第三月曜日）会場 大阪俱楽部会議室 締切 午後二時

兼題 水草生ふ・春愁（幹三） たんぽぽ・春の川（暁子） その他当季雜詠

選者吟

傷負うて恋猫海を見てゐたる

細く戸を開けて二月を入れにけり

獵名残森のにほひの変はる頃

幹三

山を這ふ最後の銃声獵名残
獵名残とて肉塊を配らるる
路の薹大地の味を閉ぢ込めて

暁子

幹三 選

- 猿名残犬と語らひつつ下山
春浅し如何に友どち世にふるや
○ がんばれと思はぬでなし猫の恋
露の薹ぱつぱつ摘みて小半日
- 猿名残とて肉塊の配らるる
露の薹摘む喜びをお裾分け
二ヶ月の玻璃の内なる明るさに
恋猫に勝者敗者のあるらしく
花形に揚げられふきのたう軽し
句座なごむ紅白梅の八重咲けば
耳伏せて声の勇むや春の猫
- あの頃はわからぬ味よ露の薹
母が娘に指さす土手の露の薹
露の薹味はひ初むる山の宿
- はらわたを吐き出すばかり猫の恋
露味噌の旨さわからぬ青二歳
猿名残たふとき獲物分かち合ふ
あの銃声が最後なりしか猿名残
外出のままならぬ身よ浅き春
春浅し履き初めを待つ赤い靴

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|---|-----|----|----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 暁子 | 乱 | 眞知子 | 安廣 | 暁子 | 真知子 | 太美子 | 眞知子 | 太美子 | 暁子 |
| かな子 | 翠 | | | 邦夫 | 遊子 | 盛雄 | 惠子 | 兵十郎 |

幹三 特選句講評

- ・ がんばれと思はぬでなし猫の恋 真知子
- ある時は悲痛な、ある時は懇願するように、ある時は不当を訴えるように鳴く。うるさい中にふと憐憫の情が湧いた気持ち、分らないでもなし。

- 山の辺の道の曲がるや露の薹
恵方へと雲の流るる速さかな
○ 春浅し手毬のごとく猫眠る
しばらくは旅に出ますと浮かれ猫
このあたり探すまで無く露の薹
- 猿果てて犬の眼も緩みけり
樹々の間に皮干す家や猿名残
金星の瞬き揺るる浅き春
草の乱起きし村道露の薹
朝帰りせし恋猫のいびきかな
- 野を行けば杖の先にも露の薹
兵十郎 遊子 盛雄 遊子 輝子 輝子 暁子 暁子
- 瑛三

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
| 瑛三 | 兵十郎 | 遊子 | 盛雄 | 遊子 | 輝子 | 輝子 | 暁子 |
| かな子 | 太美子 |

・ 猛名残とて肉塊の配らるる

暁子

狩猟としての成果であり、厳しい冬を乗り越えた人間の糧となるものであるが「肉塊」という言葉はいかにも生々しい。この猛期に命を失くしたものへの憐れみを感じるのである。

・ 春浅し手毬のごとく猫眠る

盛雄

「春浅し」は、「早春」や「春寒し」と違つてやわらかく情緒的な言い方。そのニュアンスが「手毬」「猫」「眠る」とよく響き合つてている。

・ 猛果てて犬の眼も緩みけり

堯子

寒い山中で獸を追い、命の危険もあつたであろう。ペット犬とは全然違う。そんな機能的な犬にも春が来た。穏やかな眼差しに戻つてほしいというのは作者の希望かも知れなけれど。

・ 猛友の一人欠けたる猛名残

惠子

この猛期に起きた不慮の事故であろうか。春が来てその友のことを語らないながら、酒を酌み交すのかも知れない。猛の仲間のつながりを想像する一句。

・ あの頃はわからぬ味よ路の薹

恵子

読者それに「あの頃」を思させる。美しい壊れ物のような路の薹、その微妙な味が人それに記憶を呼び起させれる。

・ 山の辺の道の曲がるや路の薹

兵十郎

ゆつくりと山に沿つて曲がる道に見つけた路の薹。句の一つ一つの言葉がそれ春らしさを感じさせる。いいお日柄である。

暁子 選

あの頃はわからぬ味よ露の薹
落の薹ぼつぼつ摘みて小半日
花形に揚げられふきのたう軽し
獵名残森のにほひの変はる頃
◎罷注意文字のかすれや獵名残
二ヶ月の玻璃の内なる明るさに
朝帰りしよぼと恋猫裏口へ
香の残る手で料理する露の薹
分け入つて熊野古道の獵名残
金星の瞬き搖るる浅き春
句座なごむ紅白梅の八重咲けば
傷負うて恋猫海を見てゐたる
浅春の大路陥没闇無残
田舎宿料理教はる露の薹
恋猫よ一途なそなたらやみぬ
恋猫が窓辺に論文抄らず
◎尖るのを終へし木の芽の丸くなる
○獵果てて犬の眼も緩みけり
わが庭でいういう仮寝恋の猫

| | | |
|-----|-----------------|-----|
| 恵子 | 朝 | かな子 |
| 安廣 | 樹々の間に皮干す家や獵名残 | 兵十郎 |
| 太美子 | 獵名残嵐が丘の鹿シチュ | 乱 |
| 幹三 | 色淡きちひろ絵本に兆す春 | 和江 |
| 兵十郎 | あの銃声が最後なりしか獵名残 | 太美子 |
| 太美子 | しばらくは旅に出ますと浮かれ猫 | 輝子 |

暁子 特選句講評

- ・ 罢注意文字のかすれや獵名残

兵十郎 獵期は十一月十五日から翌年二月十五日まで（北海道は十月一日から一月三十日まで）である。獵は主に銃を使つてするが、罷も仕掛けであるのだろう。獵期最後の頃になると「注意」の文字も消えかかっている。獵の危険性のようなものを感じる。

| | |
|-----|-----|
| 兵十郎 | かな子 |
| 乱 | 兵十郎 |
| 和江 | 輝子 |
| 太美子 | かな子 |

・香の残る手で料理する蕗の薹

眞知子

野山から採ってきてすぐに蕗味噌や天麩羅に料理する
山家の台所が目に浮かぶ。

・尖るのを終へし木の芽の丸くなる

幹三

季節の移り変わりを日々見つめる觀察の眼。最初は鋭
角の芽が多いが季節が進むにつれて膨らんでくる。「尖る
のを終へし」が面白い。

・獵果てて犬の眼も緩みけり

堯子

十二月の季題の「狩」の傍題に「狩犬」がある。「獵果
てて」が獵期ではなく、一度の獵が終わつたと理解され
ると、この句はむしろそちらの方に入るかもしれない。

「獵期果て」ならば獵名残だろう。人も犬も獵期の間は
鋭い目つきになるが、終ると普段の優しい目に戻る。

互選三句

朱美 選

春浅し手毬のごとく猫眠る

盛雄

浅き春我に自由な翼欲し

翠

尖るのを終へし木の芽の丸くなる

幹三

・樹々の間に皮干す家や獵名残
珍しい景を捉えられた。獵期の終わりごろになると、
それまでに仕留めた獸の皮が獵師さんの家の庭に干され
ているのだろう。

*今回の「獵名残」という殆どの人には縁遠い兼題に
皆様、困惑されたことでしょう。けれど講釈師ではあり
ませんが侍兼の俳人たちも結構いかにも「見てきた
ような」いい句を作られました。想像を逞しくして成り
すますのも楽しいものです。とはいうものの歳時記にあ
る現代生活とはかけはなれた事物の季題には手を焼きま
す。その季題の本質をよく調べた上で、想像を逞しくし
て成り切つたり、食べたり使つたりしたことがあるかの
ようく句を作り続け、次の世代に送るのは我々の使命か
と思いますが、やはり想像で作るのは後ろめたい気持ち
があります。

瑛三 選

今宵また深傷に懲りずうかれ猫

獵名残犬が先駆けする家路

美容師の鉄軽やか浅き春

心地よい早春の一コマ。男女ともに理容は気持がよい。

乱

安廣

輝子

惠子 選
獵名残森のにほひの変はる頃
はらわたを吐き出すばかり恋の猫

恋猫の帰還首尾など聞かずとも

帰ってきた時の様子で結果が分かる。本当にそうですね。

幹三

安廣

輝子

和江 選

花形に揚げられふきのたう軽し

わが庭でいういふ仮寝恋の猫

獵名残森のにほひの変はる頃

獵期の終わりは芽吹の香へと。

太美子

太美子

太美子

幹三

幹三

幹三

かな子 選

恋猫の性懲りもなく負けてきし

恋猫の垣を擦り抜け塀を越ゆ

さう言へば恋猫ゐないニュータウン

恋猫うるさく論文抄らず水をぶっかけたことを思い出す。

輝子

邦夫

輝子

輝子

邦夫 選

露の薹大地の味を閉ぢ込めて

塀の上七色変化猫の恋

皆で肉塊を頂くことによつて獲物の靈も浮かばれる。

暁子

恵子

暁子

輝子 選

獵名残森のにほひの変はる頃

露の薹見つけ幸せ何となく

露の薹摘む喜びをお裾分け

露の薹は食べるより、見つけて摘むことが楽しいのだ。

幹三

暁子

暁子

太美子 選

春浅し手毬のごとく猫眠る

獵名残森のにほひの変はる頃

春浅し履き初めを待つ赤い靴

「暖かくなつたら」と外出を待つ母子。「赤」の効果。

盛雄

幹三

幹三

かな子

堯子 選

熊たちの森鎮もるや獵名残

獵名残森のにほひの変はる頃

高きに吠え低きに喰り猫の恋

真夜中に聞こえる恋猫の叫び声をうまく表現された。

翠

幹三

幹三

幹三

参加者自選句

恋猫は恥ぢらひもなく声高し
スイスでも同じ仕様や猫の恋
色淡きちひろ絵本に兆す春
恋猫が窓辺に論文抄どらず
涸るる地に吹き出しにけり露の薹
あの頃はわからぬ味よ露の薹
露の薹見つけ幸せ何となく
わが庭でいういふ仮寝恋の猫
美容師の鉄軽やか浅き春
樹々の間に皮干す家や獵名残
恋猫や馴染ある声向ひの子
がんばれと思はぬでなし猫の恋
外出のままならぬ身よ浅き春
石庭の蔭に角出す氷柱かな
はらわたを吐き出すばかり恋の猫
雜踏の中老ひし身の西行忌
露の薹花芽ふふめば天ぶらに

朱美瑛三和江かな子邦夫
堯子恵子堯子惠子
輝子太美子輝子太美子
兵十郎茉衣眞知子兵十郎茉衣眞知子
翠盛雄安廣遊子乱

ひとこと

山田安廣

寒い日が続きますね。合同句集は初校の校正も概ね終わって、ほぼ最終の原稿が出来る所までこぎつけました。改めて皆様方のご協力に御礼を申し上げます。配布は三月下旬か四月上旬になると思います。

暁子さんのお話。

兼題には今回の獵名残のように日頃経験した事の無いようなものに出くわす事がある。句作はなかなか難しいが、それになり切る(この場合は自分が獵師になり切る)事で対応したい。ただ、このような形ででも季語を残して行かないと古い季語を使った名句が消えてしまうので、皆さん頑張りましょう。